

平和の使者派遣事業に参加して

師勝中学校 三年 栗山 美桜

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原爆が投下されました。そして、投下されてから約十秒後、広島は色を失いました。あたり一面は焼け野原と化し、人々は放射線や火傷によって身も心もボロボロな状態になりました。目の前に広がるのは色のない世界。火傷を負った顔や体から今にも垂れ落ちてしまいうような皮膚。変わり果てた家族や友達の姿。皆さんは想像できますか？自分の街が、両親が、兄弟がそして友達が、たった一つの爆弾で、たった十数秒でなくなってしまう現実を。私は想像することが出来ませんでした。戦争を知らない私にとって、原爆はまるで現実味のない話だったからです。

しかし、今回参加した「平和の使者派遣事業」の一日目に行った平和記念資料館で、戦争や原爆の恐ろしさを現実として見る事が出来ました。資料館には戦争や原爆に関する資料がたくさん展示してありました。投下後の街の様子を再現したジオラマや戦時中と戦後のポスター、ボロボロになった服や八時十五分で止まった時計などがありました。特に印象に残っているのは、被爆者の写真です。顔全体の皮膚が焼けこげてボロボロになり、かろうじて鼻と口の形が分かるような女の人の写真や、全身火傷を負い、皮膚全体の表面組織が壊され背中が灰のように白くなった男の人の写真もありました。どれも生々しく、変わり果てた人の姿に言葉も出ませんでした。これが現実に起きたことだというのが、信じられませんでした。しかし、それらの写真は「これが原爆の恐ろしさだ。これが現実だ。お前は何も知らないのだろうか？」と私に訴えてくるようでした。戦争も原爆も教科書だけで知っている気になっていた私にとって、資料館で見たものはどれも衝撃的なものばかりでした。また、そのどれもが私に「もうこんなことが二度とあってはいけない！」と思わせてくれるものばかりでした。

二日目には「平和記念式典」に参列しました。式典の会場は、朝早くからたくさんの人で混雑していました。外国の方もたくさんみえて驚きました。国連事務総長やアメリカ・フランス・イギリスの代表が、今年初めて式典に参列しました。午前八時に式典が始まり、市長の「平和宣言」や子ども代表の「平和への誓い」がありました。そして、午前八時十五分、黙祷。いつもなら、知らないうちに過ぎ去る一分間も、この日だけは、長く感じられました。ゆっくりと目を閉じ捧げた黙祷。静けさの中、鳴り響く鐘の音。その音はきつと、いつまでも参列者の心の中に響いていることだと思えます。

今回の「平和の使者派遣事業」は私にとつてとても良い経験になったと同時に、戦争や原爆について考える機会を与えてくれました。広島に原爆が投下されてから六十五年。広島は活気ある街へと変わっていました。それはきつとたくさんの人たちが支え合ってきたからだと思えます。

みんなが平和を願い、助け合ってきたからこそ、広島は活気を取り戻したんだと思います。戦争や核兵器は、怒りや憎しみ・欲望の塊だと思います。自分の感情のままに相手を傷つけ、利益を得る最も醜く悲しいものです。そんな戦争をなくし、核兵器を廃絶するために私たちが出来ることは、戦争の苦しみを未来へと伝えていくことと、相手を理解し認めあう心をもつことだと思います。私は、広島で見たもの、感じたことをこれからたくさんの人に伝えていきたいと思っています。

ヒロシマが教えてくれたもの

西春中学校 三年 西川 卓弥

今の広島を見て、昭和二十年八月六日午前八時十五分に原爆が投下されたなんて、想像できません。たった一発の原爆でたくさん尊い命が一瞬にして失われたなんて信じられません。なぜなら、この現実を目の前で見て、現代の人々へ伝えていく人が高齢化し、そのことを知っている人が少なくなったからだと思います。なので、今回の貴重な体験をさせてもらって、僕自身が家族や友達に伝えないといけないと思いました。

資料館には原爆が投下された当時の写真や道具、記録などがたくさん展示してありました。写真には一枚一枚どれもその時の状況を痛いほど僕に教えてくれました。どの写真も残酷過ぎて、つい現実から逃げたくなるものばかりでした。今でも、原爆と聞くといろんな写真が頭に浮かんできます。

戦争が終わって六十五年後の今も原爆の後遺症に苦しんでいる人や家族の方の事を思うと、戦争は六十五年経っても人々を苦しめ続けていることを考えると、全身に鳥肌が立ちます。今思うと、戦争をやらずに解決する方法はなかったのでしょうか。お互いの考え方や見方を変えたらこんな残酷な戦いはなくて済んだと思います。でも、今から過去を悔んでも仕方がないので、これからの教訓としては、原爆投下は、広島・長崎を最初で最後にして欲しいことです。なので、二度と同じ過ちを繰り返さないためにも、唯一の被爆国である日本国民が中心になって世界中の核兵器廃絶と戦争反対を強く訴えていかなければならないのです。そして僕たちはこの原爆の恐ろしさを後世に語り伝えていく事が僕達のととても重要な使命だと心から感じました。

平和のために

白木中学校 三年 青木 萌子

決して目を背けてはいけぬ過去がある。二度と繰り返してはいけぬ過去がある。

私は、この夏、平和の使者として広島を訪れ、原爆ドームや資料館を見学し、平和記念式典に参加しました。あの日から、頭の中を「なぜ」という二文字がさまよっています。なぜ戦争をするのか、なぜ戦争が絶えないのか、そして、なぜ、今なお核が存在するのか。

私は原爆の恐ろしさを知っているつもりでした。でも、それは本当にわかっているとは言えないものでした。それほど二日間の体験は私にとって衝撃的なものでした。帰宅してすぐ、家族に見聞したことや思ったことを全て伝えようとしたくらいです。

原爆資料館の展示物は、想像していたより生々しく、最初は直視することができませんでした。でも、目を背けてはいけぬ、受け止めようと思うと、今度は一つ一つが語りかけてきました。それも私に大きな重圧を与えるかのように。印象に残った物の一つは原爆の被災を表現したジオラマです。原爆投下の前と後の広島町の様子は全く違いました。たった一つの爆弾で、家などがなくなり、町はまさに黒一色でした。さまよい歩く人々の顔は赤く、服はボロボロで皮膚は焼けただれています。人々に襲いかかる熱線、爆風、放射線。一つの爆弾が一瞬にして尊い命を人々の笑顔を奪ったのです。そして被害者の写真は私にこう語りかけてきました。「子供を返して!」「お母さんはどこ?」「この被害の様子を受け止めて。」「私たちと同じ目にあわせないで。」「戦争を二度と起こさないで。」それは、悲しみや苦しみ、怒り、そして願ひでした。

翌日の平和記念式典では、私も黙祷をささげました。八時十五分からの一分間が私には長く感じられました。公園中が暗く悲しい感じに包まれました。戦争を知らない私ですが、昨日の資料館の様子が思い出され、自分があの戦争の中にいたような気持ちになりました。そして、戦争はあつてはいけぬと強い思いが心に湧いてきました。打ち鳴らされた平和の鐘の音は心に響き、何か突き刺さるような気がしました。それは、被爆者の思い、そして平和を願う気持ちだったのかと今思います。「ひろしま平和の歌」を歌っていると会場にいる人全ての心が一つになったような気がしました。

今年の平和記念式典は国連の事務総長やアメリカ、イギリス、フランスの代表が参加した意義あるものでした。これでヒロシマの願いがより世界に発信できると思います。外国人席が足りないほど、一般の外国人の参加者も多かったです。私には普通の外国の方の列席が多いことの方がより意義のあるように思えました。涙を流す方もいて、思いは伝わり、皆同じ気持ちになるのだと思います。原爆の恐ろしさや戦争に反対する思いが世界中に広がるのは、こういう方たちがいるからだと考えています。

「平和の誓い」を述べたのは小学生でした。これは世代を超えて、原爆や戦争の恐ろしさを語り継ぎ、戦争や平和について考え続けるという意味があるのだと思います。

現実には、世界のどこかで戦争が起こり、核を保有している国があります。あの「なぜ」の二文字は私の頭から消えることはないでしょう。でも平和のために私にできる小さなことを見つけました。

二度とこの過去を繰り返さないためには、過去のことにしてはいけないのだと思います。私にできることは、まずこの体験を多くの人に伝えることだと思います。先日の平和夏まつりでは、平和都市宣言を発表するというよい機会をいただき、思いを込めて述べました。そのとき、自分の住む地域でも平和を願っているのだと肌で感じました。また、自分の周りの友達にこの体験を真剣に語っていききたいです。

語り継ぐ、それが私の平和のための行動です。

一瞬から今、永遠に

訓原中学校 三年 渡邊 早紀

「未来へ繋げていくこと。」広島に行き、原爆について学び、私の胸にはその言葉が響いている。二〇一〇年の広島は祈りに包まれていた。

広島に行くこと決まった時から多くの人に「資料館をしつかり見ておいで」と言われた。原爆の姿を、負わされた傷や病を目をそらさずに受け止めることが私の目的だった。

資料館に足を踏み入れ、一步一步進んでいった。映像や写真、遺品が静かに、でもはっきりと爪痕をきざんでいた。そこには六十五年前の一瞬が永遠に戻らない現実があった。

多くの人がカメラの中に資料として展示品を写していた。私はポケットの中のカメラを出すことができなかった。一緒に見学していた友達に「撮らないの。」と聞かれた。あいまいに笑った私は「資料」として目の前にあるものをとらえられなかった。痛い程に被爆者の現実が横たわっている風景。恐怖と痛みに立って、目に映すことが精一杯であった。

一夜明け、平和記念式典に参列した。小学生の子が「平和への誓い」を宣言した。資料館に展示されていた昨年の記事を読んだ私は小学生の誓いに深く感動していた。

今年の誓いでは「悲しい過去を変えることができませぬ。しかし、過去を学び、強い願いをもって、一人一人が行動すれば、未来を平和に導くことができはるはずです。」ととなえていた。

原爆から六十五年。今では実際に経験した人たちも少なくなり、当時のことを誰もが知る状況ではない。しかし、広島には平和の想い伝わっている。親から子へ、孫へと忘れてはいけぬ事実を残している。私は少しだけかもしれないがその姿を見て学ぶことができた。

あの一瞬から今にかけて人々が思う世界平和は変わらない。私は次の世代にもその願いを伝えたい。未来へ繋げていくことこそ平和が実現するための唯一の方法なのだから。

命

熊野中学校 三年 浅野 萌子

六十五年前の八月六日、広島を悲劇が襲いました。頭では分かっているつもりだったけれど、実際に広島を訪れてみると予想以上に残酷で、衝撃的で心が痛みました。六十五年たった今、広島は華やかで活気溢れる街へと生まれ変わりました。しかし、戦争が、空襲が、そして原爆が広島の人々の体、心に残した傷は決して軽くはありません。体の傷は治っても心の傷は一生背負っていかねければなりません。被爆者の方々にとって原爆は辛い記憶しか残っていないと思います。

広島の平和記念式典に参列して改めてたくさんの方が平和を願っているんだなと思いました。性別が違っても、年齢が違っても、国籍が違っても平和に対する気持ち、毎日笑顔で過ごしたいという気持ちは世界共通なんだなと感じました。

資料館にはたくさんの方々の思いが詰まっています。中でも「黒こげになった弁当箱」は私の中で一番印象に残っています。朝、その子のお母さんが作ってくれたお弁当を一口も食べることなく亡くなってしまったということがその子にとってもその子のお母さんにとっても悲しく、悔しいことだったと思います。そのお弁当箱は「食べることができるのは幸せなことなんだよ。僕の分までたくさん食べて元気に生きてね。」と語りかけているようでした。

私は今でもなぜ戦争をしなければならなかったのか分かりません。戦争は自然も人も壊してしまいます。私は戦争が許せません。しかし、起きてしまったものは変えられません。負ってしまった傷は消えませんが。その中で私たちにできることは一日でも早く平和な世界を迎えるために身近なところから戦争の悲惨さ、辛さを伝えていくことだと思います。

私たちには総理大臣のように力があるわけではないので戦争をやめさせることはできません。しかし、家族や友達などの身近な人に伝えることが世界平和への一歩に繋がったら嬉しいですね。戦争の怖さ、苦しみを体験した人は月日がたつにつれ段々少なくなってしまうと思います。戦争の辛さを知った私たちに体験した人がいなくなってしまうことも伝えていくことができます。

平和な世界を築き、笑顔で過ごせる生活を送っていくためにも、この経験を忘れず、伝えていきたいと思っています。

平和

天神中学校 三年 田中 かおる

「水！水！水！……！」

今から六十五年前の八月六日に広島に投下された原子爆弾。恐ろしい原爆によつて身体も心も傷ついた人々が、水を求めて歩き回っている姿が描かれた絵に、私は目がくぎ付けになりました。

資料館には、予想以上に生々しく、目をそらしたくなるような写真や遺品が数多く展示されていました。ボロボロになった服、人影が残った石、黒こげた弁当箱。展示されている物一つ一つが、戦争、原爆の怖さを静かに訴えているようでした。原爆の悲惨さがひしひしと伝わってきて、年月がたった今でも苦しんでいる人がいることを知った時、怖くなって鳥肌がたちました。日本で戦争がなく、平和な時代に生まれ、平和な時代を生きている私にとつて、日本でこんな風に恐ろしく、悲しい出来事がおきたことは、正直信じられませんでした。

もし今、私が住んでいる場所に原爆が投下されたら……。日常生活を送っている人々の命が奪われ、町が焼きつくされる。たくさん大切なものを失う。そんなことは想像できません。想像したくありません。私は原爆という、戦争という事実から逃げたくなる時があります。しかし、私が逃げたら誰が被爆者の思いを受けとめるのか、誰が次の世代に伝えていくのか。そう考えると、戦争に真正面から向き合う勇気がわいてきます。

八月六日に行われた平和記念式典では、多くの人が参列する中で、思っていたより外国人の方がたくさんいることに驚きました。平和を願うのはどの国も同じ、私はそう思いました。式典に、核保有国の代表が参列していると知った時、私の心の中に疑問が生まれました。なぜ核を保有しているのに、平和を、核廃絶を願う私たちと一緒に平和の祈りをささげているのか、不思議でなりませんでした。ですが、平和を願う気持ちがあつたら、参列はしないでしょう。なので、原爆に関心を持つてくれることは嬉しかったです。黙とうでは、広い会場が一瞬で静かになり、鐘の音だけが大きく鳴り響いていて、少し緊張しました。毎年テレビの前で行っていた黙とうを今年始めて広島で行い、平和への思いがいつそう強くなりました。

家に帰ってから、私は「平和」について考えました。日本は戦争を行っていませんが、殺人や自殺など、悲しいニュースがたくさんあります。一体どのよくな時が平和なのでしょう。私一人の力では、戦争も、悲しい事件もなくすることはできません。ですが、小さな幸せを、平和をつくりだすことはできます。平和記念式典に参列するという、とても貴重な体験をさせていただき、私は今、自分が幸せに過ごしていることが、どれだけありがたいことなのかを思い知らされました。

原爆で亡くなった方の思いを受け継ぎ、次の世代に伝えていくことで、二度と同じ過ちを繰り返すことのないようにすることが、今を生きる私にできることだと思えました。